［連載］

あの人に会いたい

vol.51

Yui Torako

由井寅子さん

全て繋がっているからこそ、見ないフリはできない。

「あの人に会いたい」第51回目は、無農薬・無化学肥料・自家採種にこだわった野菜やハーブづくりに取り組んでいる由井寅子さんです。採れた野菜やハーブから健康食品や化粧品などの加工品、レストランでの料理の提供まで、一貫した体制で商品を提供する姿勢はユーザーから高い安心と信頼を集めています。農場に建てられた施設にOMソーラーを導入されるなど、自然エネルギー利用や建築にも関心をお持ちで、将来は住や衣の分野にも取り組みたいと語ります。自己治癒力を引き出すことで病気や身体の不調を治癒しようという「ホメオパシー」という療法の普及にも取り組む由井さんに、農業をはじめたきっかけや食べ物の大切さ、健康との関係についてお話を伺いました。

″ない″なら作るしかない

—OMとしては″農民″としての由井さんとのお付き合いになるわけですが、元々由井さんはホメオパシーという療法の普及に取り組まれてきた方でもあります。そんな由井さんが自ら農業を始められたきっかけは何だったんでしょう。

由井：もう11年前になるでしょうか。私が50歳を迎えた頃、あらためて何をしたいのか自分自身に聞いてみたんです。私は元々田舎育ちで家は農家でしたから、環境はとても良かったんです。でもそんな環境から飛び出して東京に住み、イギリスに渡り、以降かつてのような良い環境に身を置くことはありませんでした。イギリスには、週末になると農園付きのセカンドハウスで過ごすライフスタイルがありましたし、陽射しが少ないロシアでは鬱になる人が多くて、その治療のために農園での暮らし方を国が推奨していたりします。日本は食料自給率が低いにも関わらず国が農業に力を入れず、一方でアトピーや喘息などに悩む子どもたちが増え続けている現実がありました。私はそんな子どもたちをたくさん診てきましたが、一時的に改善しても、普段の食事に戻るとまた症状が戻ってしまったりして、なかなか良くなりませんでした。私は子どもたちが口にしているものに疑問を持ち、ある時農家の方に無農薬で化学肥料も使わない野菜を作ってもらえませんかと頼んだことがあったんです。でも返事は「できるわけがない」というもので、どの農家さんも行政も真剣に取り合ってはくれませんでした。だったら、患者さんや社員が食べるくらいの野菜なら自分たちで作ってみようと思ったんです。元々私たちはハーブを治療に使っていましたし、そのハーブも輸入に頼っていましたから、それならハーブも自分たちで作ればいい、ということになったんです。自ら農業をやることは、単に安全な食べる野菜を手に入れたいということだけではなくて、安全なハーブや野菜を使った安全な化粧品が作れる、また、外で汗を流すことで心身のリフレッシュにも繋がるなど、複合的な意味がありました。

—農場を確保するのも苦労されたと聞きました。

由井：そうですね。最初に群馬で土地を借りて農場を作ったんですが、突然立ち退かなくてはいけなくなりました。苦労して土を作ったにも関わらずです。そしたら今度は北海道の知り合いから洞爺にゴルフ場にする計画が頓挫した土地があると聞きました。声を掛けてくれたならと思って行ってみたんですが、水が引けないなどの問題があって途方に暮れました。幸い湧水があることが分かり、12月の雪の降る頃5名の男性社員が2㎞の水パイプを引き込んでくれました。そして、水問題は解決できたのですが、北海道はハーブの栽培には適しているものの、冬は雪で閉ざされてしまうので二毛作ができません。でも社員を遊ばせるわけには行かないので、温暖で東京からアクセスが良い土地で農業ができないかと思っていたんです。熱海に化粧品やレメディー（ホメオパシーの治療に使われる砂糖玉）を作る工場があったので熱海で探したんですが、熱海は傾斜地が多くて適当な場所がありませんでした。ですが、トンネルを越えて函南に出ると良さそうな場所がいくつかあって、貸してくれるという人から7反ほど借りてみることにしました。ところがそこは地形的に水が付きやすくて、年に2回くらい浸水してしまうような場所でした。やっぱり人が貸してくれるような場所はダメかなーと思いつつ、3、4年ほど騙し騙しやっていたんです。そんなときに東日本大震災が起きました。そこで採れた作物を被災者に提供したら皆さん飛び付かれたんです。被災地では何よりまず食べること、農業の重要性を震災を機に再認識することになりました。あらためて本腰を入れて農業に取り組まなければならないと決心して地元のJAに相談したんです。そしたら昔からオーガニックで乳製品を作られていた方で、ホメオパシーの考え方にも賛同してくれていた方が間に入ってくださって、空いている農地を紹介してくれ